

2016年シーズン全戦完走でシリーズを締めくくる。

シリーズ名:2016 全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第7戦
大会名:2016年 全日本スーパーフォーミュラ選手権 最終戦 JAF 鈴鹿グランプリ
(鈴鹿サーキット・三重県)

距離:RACE1 5.807km×19周(110.333km)/RACE2 5.807km×35周(203.245km)

予選:10月29日(土)晴れ・観衆:13,000人(主催者発表)

決勝:10月30日(日)晴れ・観衆:21,000人(主催者発表)

10月29日～30日、全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ最終戦(第7戦)が、三重県鈴鹿サーキットで開催された。DRAGO CORSEは、小暮卓史とSF14/HONDA HR-414Eの組み合わせでこのレースに参戦した。

シリーズ最終戦は、決勝レースが19週のRACE1と35週のRACE2の2レース制という特別フォーマットで開催され、これに伴って予選の形式と選手権ポイント配分も通常とは異なる方式がとられた。

● 10月29日(土)

■フリー走行:1分38秒164 2番手

29日土曜日午前9時10分から1時間にわたりフリー走行が行われた。鈴鹿サーキットは晴天となった。前日までの雨で路面には一部濡れた箇所が残った状態だったが、小暮を含む出走全車がドライタイヤを装着して走行を開始した。

路面コンディションが徐々に好転していく中、小暮は走行開始直後から中団のタイムを記録、セッティングに微調整を加えながら走行を重ねて、セッション開始50分後には1分38秒985を記録して2番手へつけた。

セッション残り7分となったところで各車、予選を想定したタイムアタックのシミュレーションに入った。小暮はさらにタイムを短縮、1分38秒164を記録して2番手に付けてセッションを終えた。

■公式予選:13位

(Q1:8位 1分38秒239 Q2:1分38秒546 Q3:DNS)

3回のセッションにわたるノックアウト方式の公式予選は午後2時15分から始まった。空は快晴、コースはドライコンディションである。今回の予選では、2レース制に伴い変則的な規則が適用された。まず20分間のQ1セッションの結果でRACE1の全スターティンググリッドを決定し、上位14台がRACE2のスターティンググリッドを決める7分間のQ2セッションに進出、残りの5台はRACE2のグリッドがそのまま決定する。Q2セッション上位8台が7分間のQ3セッションに進出し、残り6台についてはQ2セッションの順位でRACE2のグリッドが決まる。RACE2の上位8つのグリッドはQ3セッションで争われる。

Q1セッションで小暮は1分38秒239を記録してRACE1で8番手のスターティンググリッドを獲得、Q2セッションに進出した。Q2セッションではタイヤをウォームアップ、タイムアタックに入ったところ、第1コーナーでシフトダウンに不具合が発生したためアタックを打ち切って翌周に再度アタックをやり直すことになった。しかしタイヤの性能ピークが過ぎており、タイムは伸び悩んで1分38秒546に終わり、Q3セッション進出はならず、RACE2のスターティンググリッドは12番手と決定した。

● 10月30日(日)

■決勝 RACE1:7位 (32分25秒896 19周 ベストラップ 1分41秒081)

決勝レースが行われる日曜日、鈴鹿サーキットは朝から快晴となった。2レース制に伴いフリー走行セッションは設けられず、午前9時から8分間のウォームアップ走行を行った後、RACE1のスタート進行が始まった。

午前9時45分、RACE1のスタートが切られた。小暮は自分のポジションを守り8番手でレースを開始した。小暮は前走車の背後につけ、2周目に入るストレートでスリップストリームに入るとイン側からオ

オーバーテイク、7番手に進出した。

その後は、前走車に近づくものの空力の影響を受けてオーバーテイクには至らず、7番手のまま19周を走りきってチェッカーを受けた。この結果、小暮は選手権ポイントを1点獲得することとなった。

■決勝 RACE2:9位 (1時間08分50秒780 35周 ベストラップ 1分42秒445)

引き続き快晴の空の下、午後2時から8分間のウォームアップを経て、午後2時45分、決勝 RACE2 がスタートした。RACE2ではタイヤ交換ピットインが義務づけられており、ピットインのタイミングが戦略を分けることとなったが、小暮とチームはレース直後のピットストップ作戦を採り、スタートした直後にピットイン、タイヤ交換を行ってレースに復帰した。

レースに復帰した時点で小暮は見かけ上16番手につけた。その後前走車を追いかけるが、間隔が1秒を切ると空力の影響を受けて接近できなくなり、1秒前後の間隔を保ったまま一進一退のレースを強いられることになった。

レース中盤、ピットストップを遅らせた選手がピットインを始めたため、小暮の順位は16周目に15番手に繰り上がった。24周目にコース上で停止した車両を回収するためセーフティカーがコースイン、28周目にレースが再開された。セーフティカーラン中、前後の間隔が縮まったが結局レース再開後も順位の変動は起きず、一進一退のレースが続いた。

レース序盤にタイヤ交換を行ったため、小暮が装着していたタイヤは消耗して操縦性は徐々に悪化していたが、小暮は自分のポジションを守り、前走車を攻め続けた。28周目、コース上でアクシデントが発生しセーフティカーがコースイン、小暮の順位は14番手へ繰り上がった。

32周目、レースが再開された。小暮はタイヤ消耗が進んだため後方から攻め立てられながら残り4周のレースを戦うことになったがオーバーテイクは許さず、前方でアクシデントが発生したため32周目に10番手、33周目に9番手へ順位を上げ、35周のレースを走りきって、トップから18秒353後れの9位でフィニッシュした。

この結果、小暮は開幕から7戦(9レース)連続の完走を遂げ、通算8点でランキング13番手、DRAGO CORSEはランキング9番手につけて、2016年シーズンを締めくくった。2014年シリーズ第6戦でスーパーフォーミュラに参戦以来、DRAGO CORSEと小暮は通算14大会を戦い終え2年目のシーズンが終えた。

■小暮卓史コメント

予選がすべてでした。Q1は8番手でまずまずでしたが、Q2はシフトが落ちなかったためアタックができず、次の周にやり直したんですがまたシフトの調子が悪く、もったいない結果に終わってしまいました。原因はわかりませんが、オーバーレブの領域に入っていたのは事実なので自分が悪かったかもしれません。もう少しそこを意識して走れば良かったのですが、これまでは問題なかったので不注意でした。ただ、トラブルが起きなかったとしてもこの週末は今ひとつでした。開幕戦の鈴鹿では、もっと上を狙える雰囲気だったんですが、今回はそういう感触がありませんでした。RACE1では、1周を終えるときにうまく前を走るバンドーン選手に合わせる事ができて1コーナーの手前で追い抜くことが出来ました。その後、いろいろ試しながらそこそこのペースで走れましたが、前に近づくまでは出来るんですがそこからオーバーテイクするのは難しかったです。RACE2はスタート位置が良くなかったのでクルマのセッティングを変えてスタートしました。狙いは当たったんですがネガの面も出てしまって、思っていた以上にクルマが難しくなってしまう、結果としてはあまり得はしませんでした。前に抜け出すことさえできればもう少しいいペースで走れたと思うので残念です。

■道上龍コメント

今回も、予選で前の方にいかないといけななと思い知ったレースでした。予選は、Q2でシフトダウンしなかったときそのまま行けば良かったんですが、アタックを1周遅らせたらタイヤのピークを通り過ぎてしまったようです。鈴鹿は1周が長いので次のラップのアタックはきつかったようです。あれがなければQ3に行けるだけのパフォーマンスはあったと思うので残念です。RACE1ではバンドーン選手をうまく抜けたのは良かったのですが、それ以降はいつもながら前のペースにはまってしまう。ポイン

トは獲れたけども「なんとか走りきった」という感じです。RACE2は予選が12番手とあまり良くなかったこともあって、1周目にピットインしましたが、思ったほどペースが上がらず順位を落とした上に遅いマシンにひっかかってしまいました。SCが入って順位が上がりましたが、実際に勝負をして上がったわけでもなく、厳しいレースでした。RACE2では、RACE1でうちよりも後にいたバンドーン選手が優勝したところを見ると、やはり集団に取り込まれてしまうと空気の流れの乱れが影響してラップタイムが落ちてしまうのだなあと感じました。そういう意味では、今のスーパーフォーミュラは予選が勝負で、予選で浮き沈みしないように闘わないといけないんです。トップフォーミュラは本当に難しいです。今年もDRAGO CORSEの応援ありがとうございました。

